

## ハイデルベルク信仰問答講解説教3「新しい自分へ」(2011年8月21日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

主よ、わたしたちの主よ。あなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます。幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き、報復する敵を絶ち滅ぼされます。あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としてただかせ 御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました。羊も牛も、野の獣も 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。主よ、わたしたちの主よ。あなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょう。(詩編8:2-10)

さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行ふことはできないからです。」イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。(ヨハネ3:1-6)

## 【説教】

ハイデルベルク信仰問答による説教を進めております。今日は第三主日のところ、問6-8までを扱います。ここは、第一部の「人間の悲惨さ」について教えるところですが、言い換えれば、人間の罪についての教理がここにあると申し上げてよいでしょう。

信仰問答では、人間の罪、そこに人間の悲惨さがあると告白いたします。前回の説教では、その悲惨さは、結局「愛」の問題だということを示しました。神さまを愛すること、隣人を愛すること。この愛にわたしたちは完全に破綻してしまっている。そこに人間の惨めさがある。そしてそれが人間の罪の姿なのであります。人間の罪はどこで分かるか。それはわたしたちの愛を検証してみればよいのです。このことは多くを語らずしても自分自身の歩みを振り返ってみればよく分かることです。誰一人として、胸を張って、この愛に生きているとは言えないのです。この一週間の生活の中でも十分に神さまと人を愛する生活に生きてこられたか。そう問われれば非常に心もとないのです。しかも愛するどころか信仰問答では問5で、はっきりと「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」とさえ言います。それほどにわたしたちの罪は深刻なのだ。わたしたちは自分の罪をどのように理解しているのでしょうか。そんなにたいしたことではない。ちょっと気をつければよい問題だ。そのように安易に考えている。自分で修正できる問題だと。

問5にありました「傾いている」というのは、今日読んだ問8でも出てきました。「それでは、どのような善に対しても全く無能であらゆる悪に傾いているというほどに、わたしたちは墮落しているのですか」ある解説書では、この「傾く」というのは、具体的に傾いた板のことを指すとありました。その上にボールを載せれば、ボールは坂を転がり落ちる。ボールは加速度をつけて落ちて行きます。わたしたちはそのように悪に向かって加速度をつけて転がり落ちている状態だと言うのです。それは自分では止められない。もはや罪は自分で修正できる問題ではないということです。

わたしたちは、そこまで悪くないと思うかもしれませんが。自分が加速度を付けて悪に転がり落ちているなどと考えている人はあまりいない。それよりも一日の終わりに「今日は良い人をした。これで神さまもお喜びだろう」そう考えながら床に着くことだってあるのです。人間だって良いところはたくさんある。あの震災後も人間の善意がどれほど尊く、人々に勇気や希

望を与えてきたか。昨日からテレビでは24時間テレビが放映され、人間愛のあふれる行為が次々と映し出される。人々は思うでしょう。人間もまんざらではないと。人間だってやればできる。人間の愛で人々を、この地球を救うことができるのだ。

しかし、このような考えに対して、信仰問答は水を差すようなことを言うのです。いや、人間は悪に傾いている。加速度を付けて落ちている。特にわたしたち改革派の教会は、このハイデルベルク信仰問答でも明らかなように人間の墮落を徹底して言います。それを人間の全的墮落の教理と言います。それは人間の中には救いの根拠となるものは一切ないということです。でもそういう考え方がわたしたちにはどうも気に入らない。少しでも人間の可能性を信じたい。ですからそういう罪を強調するキリスト教は嫌いだ。ちっとも人間を信頼していないじゃないか。そういう声が聞こえてきそうです。更には、そういうところから逆にそのような罪を犯すような人間に造った神さまが悪いという考え方で出てきます。またそうやって神さまが罪を犯すように蛇をつかって人間を誘惑したのだと。しかし神さまはどのように人間を悪い者としてお造りになられたのでしょうか。神さまが人間を罪に誘惑したのでしょうか。また基本的に聖書の信仰は人間不信なのではないでしょうか。

そのような問いに答えるのが今日の問答です。問6、ここに基本的な聖書の人間理解があります。それは、人間は神さまに良いものとして造られたということです。その聖書の根拠は、創世記にあります人間の創造の記事であります。まず創世記1:27に「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された」とあります。また1:31に「見よ、それは極めて良かった」とあります。ここは何度でもわたしたちが立ち帰らなければならない御言葉です。つまりここにわたしたちの本来の祝福された人間がある。言わば、わたしたちのお手本です。

そのお手本とは、神さまにかたどって、その姿に似たものとして造られたということです。神さまがお手本なのです。では神さまに似たものとはどういうことでしょうか。姿、形が似ているということでしょうか。それはこのように理解してもよいと思います。先ほど人間は愛に破れていると申しました。でも神さまに似たものとして造られた人間は、本来その神さまの愛を映し出すようにして生きていることができる。人間自らが神さまの愛とはこのような愛だと示すことができるような元々存在であったということです。それくらいに神さまに似たものであった。

それはそれだけ神さまがわたしたちを信頼してくださっているということではないでしょうか。神さまは人間不信なのではない。どこまでも信頼して御自分の愛を映し出す存在として人間をお造りになられたのです。今日読んだ詩編8編にもそのような信仰があふれています。

問6には、そのように神さまの愛に生きる人間の姿が示されています。「造り主なる神をたたく知り、心から愛し、永遠の幸いのうちを神と共に生き、神をほめ歌い讃美する」「たたく知り」とあります。「知る」というのは、ただ一方的に知識として知っているという意味ではありません。聖書で「知る」という言葉は、人格的な交わりを意味しています。それは愛において必要なことです。利己的ではなくお互いが理解し合い通じ合うこと。そこに「たたく」の意味があります。愛はたたくなければ意味がありません。間違った愛でもそれを愛と感じてしまうことほど恐ろしいことはないのです。世の中にはそれこそいろいろな愛があつていいという考え方があります。他者に向かうものではなく、結局は自分に帰ってくるものを期待している。そういう自己愛でしかないものが氾濫しています。利己的で自分勝手なものでも、それが愛だと錯覚している。

それに対して神さまの愛はどういう愛か。それは自分を顧みず徹底して他者へ向かう愛であります。自己を犠牲にしてまで他者に注ぐ愛です。そこに愛のただしさがあるとすれば、人間の愛は本当に破綻しているのです。せつかく神さまの愛を映し出す存在として造られたのに、この神さまの信頼を裏切ってしまったのは人間の方です。人間の利己的な愛の何とつまらないものかです。それほどに人間を本当につまらないものにしてしまった罪がなわわたしたちに働いているということなのです。

ではこの罪、愛に破れた利己的な生き方がどこから始まったのか。それが問7で言われていることです。これは創世記第3章にある人間の墮罪の物語、アダムとエバの物語です。この人間の失敗、それは「神のように善悪を知る」というものであります。つまり神さまを差し置いて、自分がすべての善悪の判断の基準となる。神さまよりも自分が正しさの基準となるということです。そしてそのために、彼らは神さまとの約束を破りました。大切な神さまの御言葉を捨てたのです。それよりも自分が中心となった。そこに神さまを失った、つまり大いなる他者を失ったまさに利己的な人間があります。ここにすべての罪の根源があることをわたしたちは知らなければなりません。神さまを愛せない、隣人を愛せない愛に破れてしまう人間はここから始まっているのです。すべての人間はこの罪のうちに生まれてきます。つまり最初の人間アダムとエバによって、人間そのものの本性が毒されてしまった。人間の根の部分腐ってしまったのです。ですから生まれた時は罪がなく、社会に触れることでだんだん罪に染まるということではない。スイスの思想家ジャン・ジャック・ルソーは、「自然に帰れ」と言いますが、それは社会に触れない自然の状態の人間に帰れということですが、そうすれば罪がないということではないのです。小さい子どもであってもそういう利己的な罪をもっている。子どももまた救われなければならない存在なのです。

では、どうしたらよいのか。どうすれば人間はこの罪の問題を解決できるのでしょうか。そこで問8です。最後の一言に希望が見えてきます。神さまの霊によって人間は再生される。新しく造り変えられるということです。そこに新しい人間、新しい自分が始まる。そこでしか人間は、この利己的な愛から救われ、他者に向かう本当の愛に生きることはできないと言うのです。

今日は、ヨハネ福音書の御言葉を読みました。ニコデモというユダヤ人の教師が主イエスのところを訪ねてきます。彼はファリサイ派であり、ユダヤ議会の議員であり、ラビ教師でありました。それは言わばエリート中のエリートです。申し分のない生き方をしている。人々の尊敬も受けている。人間の可能性の中で生きていた。でも何か足りないと感じたのでしょうか。自分で神さまを愛し隣人を愛する生活を作りながらやはりどこ

かで行き詰まり、限界を感じていたのかもしれませんが。人間の作り出す愛の限界、そこに彼は気づき始めていた。自分でもどうにもならない。だからひっそりと夜、主イエスのところに来て、その自分の行き詰まりの原因を尋ねるのです。

主イエスは「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と。更に「だれでも水と霊とによって生まれなければ神の国に入ることはできない」とニコデモに告げます。そこにわたしたちの行き詰まりを打開する道がある。利己的ではなく、本来の愛に生きることができ祝福された人間として生きる道は、人間が自分で作り出すのではない。神さまによって新しく与えられるものである。だからこそその道をキリストは御自身の命をもって切り開いてくださいました。同じヨハネ福音書第20章で、十字架で死に、よみがえられたキリストが弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けよ」と言われたところがあります。そこに新しい創造が始まりました。このキリストによってわたしたちは新しくされる。聖霊がこのキリストへとわたしたちを助け導くのであります。

それによって、もうわたしたちは坂道を転がり落ちる人生は終わった。キリストがこの傾いた斜面をまっすぐにしてくださいました。まっすぐなところに立たせてくださった。だからこれからは神さまを愛し、人を愛することができる。利己的ではなく、本当に他者のためにささげる愛に生きることができ。わたしたちはその新しい命を生き始めているのです。

改めて申し上げますが、人間には自分で愛に生きる可能性はありません。まったく墮落しているのです。ただ神さまだけがこの人間に愛に生きる可能性を与えられるのです。そしてそれはすべて神さまの恵みなのです。その恵みによってのみわたしたちが立ち得ることを感謝しましょう。祈りをささげます。

天の父よ。聖霊によって、あなたの恵みの中に立たせてくださることを感謝いたします。そうでなければ罪に毒され、悪に向かって転がり落ちる人生でありました。それほどに自分ではどうすることもできない、愛に破れた者であります。そのわたしたちを憐れみ、もう一度、愛に生きるように立たせてください。そのために御子の命を、その愛を注ぎ尽くしてくださいました。その恵みに気付かせてください。人間の可能性ではなく、神さまの全能の御業に委ねることができまうように。主の御名によって祈ります。アーメン。